

図書紹介

大野敏明(賛助会員)著

『軍歌と日本人』

国民を鼓舞した197曲

軍歌でたどる近代日本史

大東信祐 陸自57

筆者は、言論界に永く籍を置き、防衛問題についても深い見識を有している識者である。かつて借行誌上で八巻明彦氏(61期)が軍歌について健筆を振るわれた時期があるが、それより後の世代において軍歌について最も造詣の深い人物である。

軍歌は、明治から昭和まで80年近い帝国陸海軍の歴史の中で生まれ、現代まで唄い継がれる名曲も多く、それらの歌が唄われた時代の日本の姿を浮き彫りにしている。

本書において著者は歴史的軍歌、陸軍の学校の歌、陸軍の部隊の歌、陸軍の儀礼の歌、日清・日露戦役の歌、満洲・上海事変の歌、支那事変の歌、大東亜戦争の歌、海軍の歌、に区分して軍歌・戦時歌謡の背景及び特色を解説し、その歌詞を紹介している。

敗戦後、軍歌の名曲と云われた軍艦(軍艦行進曲)、愛国行進曲等も「軍国主義的である」として排撃され影を潜めた時期があった。

時間の経過とともにこの制約は逐次緩み、放送等においても「軍歌」

を主題とした番組も放映され、軍隊酒場等が現れたが、戦争を体験した世代の老年化に伴いこれらも影が薄くなっていった。

軍歌には叙事的な歌詞が多く、歌詞を唄うことにより歴史的な事績を学ぶと云う精神教育的な要素もあり、団体で斉唱することにより隊の団結心、隊員の帰属意識を持たせると云う効果も期待されたものと思われる(例、四条畷・波蘭回顧・元寇・勇取なる水兵)。南方の孤島メレオン島に孤立した某部隊では「来たれや、来たれ」(皇国の守り)が愛唱されたこと聞いたことがある。

また、一般の人々が熱唱した戦時歌謡(軍国歌謡)には映画等の主題歌等もあり、その愛唱された歌は、国民が軍・戦争をどのように見ていたかを知る貴重な手がかりの一つでもある。

軍歌・戦時歌謡は近代日本音楽の歴史遺産であり、ひとつの文化である。軍歌・戦時歌謡を知る人は少なくなつた。しかし、このまま歴史の彼方に埋もれさせていい筈がない。そこには文字通り、日本近代の血と汗と涙の結晶が凝縮されているからである。

産経新聞出版刊
千代田区大手町一七七一
電03-3242-9930
価1800+税

図書紹介

田中伯知著

『陸上自衛隊の災害派遣の社会学的分析』

松村 興延 陸自64

朝霞駐屯地の広報館でこの本に巡り会った。早稲田大学アジア太平洋研究センター専任教員田中伯知著、「陸上自衛隊の災害派遣の社会学的分析」、「元岩手地方協力本部長元陸将補高橋俊哉」陸上自衛隊の災害派遣の社会学的分析」の文字に目が釘付けになった。

まず高橋俊哉氏の「刊行に際して」があり、本書が東日本大震災での自衛隊の出勤の概要を纏め、大災害を生き抜く未来への警鐘であると簡潔に紹介している。自衛隊の立場に共感を込めて刊行され、迫りつつある南海トラフ巨大地震、首都圏直下型地震等への警鐘で次代に伝えられるべきとの結びである。

筆者は国の大規模災害に対して国の総力を挙げる点で全く足りないと考えた時があった。それは阪神淡路大震災時、救援物資輸送の自衛隊艦艇の神戸港使用を港湾管理の地方自治体が海底を破壊する恐れありと妨げた例である。一刻も早く被災者のもとへ大量の救援物資を届けるのに海路は有力な手段であることを誰もが分かっていたはず。岸壁破損があれば船底の浅い小舟に積み替えなど万策を尽くすべきではなかったか。

地方自治体が自衛隊に非協力の例であるが、何よりも被災者救助が二の次にされる風潮はよいはずがない。

この風潮を根絶させるには、学界が先駆けとなつて言論界を啓発すべきと希望していたが、正にその願望に一致する「書」と考えた。

著者は記事の内容に特に心を打たれた内容を紹介している。部隊の広報室員や協力本部長から取材した様子と、論説が載っている。また、被災者から出勤部隊に頂いた感謝・お礼の手紙もあった。

現職および元自衛官は、このような手紙を知っていたが、マスコミ等が取り上げることがなく、「缶詰ばかりで喉に通らない」等の不満を取り上げていた。そんな風潮に耐える若い自衛官には、「幼い子供からのお礼状」が大学で刊行された書籍に掲載されるのは何よりの励ましとなる。

災害派遣隊員が「遺体収容」等の悲惨な場面を想像させる叙述があった。被災地域に親族を持ち、その安否不明の儘任務遂行に服している隊員が多数あった。彼らの激しく揺れる心の内容を思わせる記述があった。そうした悲惨さが家族の行方不明の隊員に如何程の苦痛を与えるか、言葉もない。そして何よりも職務離脱者が出たという情報は一切無かったことに、元自衛官の一人として敬意を捧げると共に、叙述した著者に感謝したい。

借行会員にとつてはもの足りないかもしれないが、著者の努力をくみ取って頂きたい。